

## 第6章 総括

### 第1節 1区の調査成果

梅田萱峯遺跡1区は、尾根部西側の1-B区と北東側斜面部の1-C区に分かれ、竪穴住居2棟、段状遺構1棟、貯蔵穴2基、落とし穴1基、製炭土坑1基、その他土坑2基、土器溜り1ヶ所を検出した。本遺跡において生活の痕跡が明らかとなるのは縄文時代で、晩期の土器が1-C区谷筋で散見され、また1-B区では弥生時代の貯蔵穴に切られる落とし穴が確認された。丘陵尾根上が居住地として利用され、集落が営まれるのは弥生時代中期後葉期である。平成17年度調査で明らかとなった竪穴住居を加えると11棟となり、尾根平坦面に占地するものと緩斜面に位置するもの、さらな急峻な斜面上に築かれるといった立地に相違点が見られる。1-B区は尾根部西側の傾斜変換点に当たり、平成17年度調査の2棟を加えると竪穴住居3棟、段状遺構1棟が構築されることから、西側谷部においても生活域が広がる可能性がある。1-C区では、竪穴住居1棟、竪穴住居に付設する貯蔵穴1基、土坑2基が確認されているが、いずれも谷筋に向かう急峻な斜面上に築かれていることが特色である。

とくに貯蔵穴を付設するSIH1は、他の遺構と一定の距離を置いて、傾斜面を造成して谷開口部を望む場所に築かれている点で立地のあり方として興味深い。

後続する時期の遺物として奈良時代の須恵器、土師器の埋設ピットが1-C区で検出されており、谷筋から斜面部において生活痕跡を残している。谷筋では弥生時代中期後葉と奈良時代の遺物包含層が厚さ30～60cmと良好に遺存しており、中心部では弥生時代中期後葉の土器溜りが確認された。これらの遺物包含層や土器溜りは、尾根部からの流れ込みのみに起因するのではなく、谷筋も生活域としての位置づけが必要である。谷筋は居住域と生産活動域を結ぶルートであった可能性があり、今回の調査によって尾根部のみならず谷部の調査の重要性が明らかになったことも大きな成果であった。

### 第2節 梅田萱峯遺跡全体から見た3区の特徴

今回調査した梅田萱峯遺跡3区では、竪穴建物5棟、段状遺構1棟、掘立柱建物4棟、落とし穴8基、貯蔵穴2基、その他土坑11基を確認した。土器は弥生時代後期中葉のもの、及び後期初頭に遡る可能性のあるものをそれぞれ1点ずつ確認した以外は、すべて弥生時代中期後葉のものであった。これらの土器を詳細に観察すると、甕の口縁端部は拡張されており、いくらか見られる頸部の指頭瓦痕文突帯は退化したものが多く、広口壺も頸部外面に凹線文を施すもので、弥生時代中期後葉でもⅣ-2からⅣ-3段階の特徴を示している。広口壺頸部に断面三角形の突帯を貼り付けた壺120や、櫛描文による装飾を施した無頸壺121のように古い要素をもつものもあるが、こうしたものは例外的で、3区は弥生時代中期後葉でも新しい段階の集落であったといえる。

平成17年度に調査した1-A区は、浅い谷を挟んで隣接する丘陵上に立地する。ここも基本的には弥生時代中期後葉の集落であるが、土器を観察すると、甕の口縁端部の拡張は弱く、頸部に指頭瓦痕文突帯を巡らす割合が高い。また形式的には凹線文が確立する前段階の中期中葉としていいものも存

在する。壺でも頸部外面に貼付突帯を巡らす、中期中葉的な要素を示すものがある。こうしてみると1-A区は中期後葉でも古い段階の集落で、IV-2からIV-3段階の集落である3区とは時期差がある。遺跡全体に調査が及んでいないため不明な部分も多いが、居住域の移動があったものと考えられる。

集落構造を見ても、3区には1-A区で確認されていない掘立柱建物がある。遺物を伴っていないが、弥生時代中期後葉との推定が許されれば、切り合い関係から、やや規模を大きくし、新たに独立棟持柱を付し、主軸を変えて建て直されたことになる。遺物では1-A区に比べ鉄器の保有量が増えるとともに、1-A区では見られなかった管玉製作に伴う資料や絵画土器、分銅形土製品が確認された。新たなものづくりや祭祀形態が導入されたことがうかがえる。

以上のように、3区と1-A区を比較すると、弥生時代中期後葉の中でも時期的な変遷とともに集落構造の変化が確認された。これは単に集落立地が変わるとか、遺物組成に新たな要素が加わるといった表面的な面にとどまらず、弥生時代中期から後期への社会変動前夜の様相を示していると思われる。将来的には3区周辺の丘陵部の調査も予定されており、当該地域における弥生社会の移り変わりがより具体的に語られよう。